

平成18年3月期 個別中間財務諸表の概要

平成17年11月24日

会社名 株式会社 但馬銀行

上場取引所

非上場

コード番号

本社所在都道府県

兵庫県

(URL <http://www.tajimabank.co.jp>)

代表者 役職名 取締役頭取 氏名 倉橋 基

問合せ先責任者 役職名 経理部長 氏名 佐伯 宏之 TEL (0796)24-2111

中間決算取締役会開催日 平成17年11月24日

中間配当制度の有無 有

中間配当支払開始日 平成17年12月9日

特定取引勘定設置の有無 無

単元株制度採用の有無 有 (単元1,000株)

1. 17年9月中間期の業績(平成17年4月1日～平成17年9月30日)

(1) 経営成績 (注) 記載金額は百万円未満を切り捨てて表示しております。

	経常収益		経常利益	
	百万円	%	百万円	%
平成17年9月中間期	7,657	(0.9)	1,292	(10.0)
平成16年9月中間期	7,585	(4.4)	1,437	(103.8)
平成17年3月期	15,067	(3.7)	2,490	(32.5)

	中間(当期)純利益		1株当たり 中間(当期)純利益	
	百万円	%	円	銭
平成17年9月中間期	732	(6.1)	9	17
平成16年9月中間期	780	(99.4)	9	77
平成17年3月期	1,456	(37.3)	18	8

(注) 期中平均株式数 平成17年9月中間期 79,872,959株 平成16年9月中間期 79,850,152株
平成17年3月期 79,857,284株

会計処理の方法の変更 有

経常収益、経常利益、中間(当期)純利益におけるパーセント表示は、対前年同期増減率

(2) 配当状況

	1株当たり 中間配当金		1株当たり 年間配当金
	円	銭	
平成17年9月中間期	2	50	5円00銭
平成16年9月中間期	2	50	
平成17年3月期			

(注) 平成17年9月中間期配当金の内訳
普通配当金 2円50銭

(3) 財政状態

	総資産	株主資本	株主資本比率	1株当たり 株主資本	自己資本比率 (国内基準)
	百万円	百万円	%	円 銭	%
平成17年9月中間期	778,069	33,850	4.3	423 78	(速報値) 9.95
平成16年9月中間期	760,799	32,189	4.2	403 12	10.30
平成17年3月期	772,086	33,217	4.3	415 71	10.17

(注) 期末発行済株式数 平成17年9月中間期 79,875,000株 平成16年9月中間期 79,850,010株
平成17年3月期 79,875,000株
期末自己株式数 平成17年9月中間期 -株 平成16年9月中間期 24,990株
平成17年3月期 -株

2. 平成18年3月期の業績予想(平成17年4月1日～平成18年3月31日)

	経常収益	経常利益	当期純利益	1株当たり年間配当金	
				期末	
通期	百万円	百万円	百万円	円 銭	円 銭
	15,000	2,900	1,700	2 50	5 00

(参考) 1株当たり予想当期純利益(通期) 21円28銭

上記の業績予想につきましては、現時点で入手可能な情報に基づき判断したものであり、実際の業績はこれらの予想数値と異なる結果となる可能性があります。業績予想の前提条件その他の関連する事項につきましては、添付資料の6ページを参照してください。

中間貸借対照表

(単位:百万円)

科 目	当中間会計期間末 (平成17年9月30日) (A)	前中間会計期間末 (平成16年9月30日) (B)	比 較 (A - B)	前事業年度末の 要約貸借対照表 (平成17年3月31日)(C)	比 較 (A - C)
(資 産 の 部)					
現 金 預 け 金	23,752	21,472	2,280	25,749	1,997
コ ー ル 口 ー ン	40,728	49,496	8,768	32,191	8,537
買 入 金 銭 債 権	125	104	21	111	14
商 品 有 価 証 券	710	633	77	716	6
有 価 証 券	116,031	112,467	3,564	108,143	7,888
貸 出 金	576,796	554,770	22,026	585,071	8,275
外 国 為 替	812	1,200	388	829	17
そ の 他 資 産	2,287	2,033	254	2,236	51
動 産 不 動 産	12,241	13,169	928	12,340	99
繰 延 税 金 資 産	2,277	2,648	371	2,255	22
支 払 承 諾 見 返 金	3,648	4,589	941	3,998	350
貸 倒 引 当 金	1,343	1,787	444	1,557	214
資 産 の 部 合 計	778,069	760,799	17,270	772,086	5,983
(負 債 の 部)					
預 金	734,655	717,194	17,461	727,888	6,767
外 国 為 替	1	4	3	0	1
そ の 他 負 債	2,283	2,954	671	3,345	1,062
退 職 給 付 引 当 金	2,721	2,839	118	2,783	62
再評価に係る繰延税金負債	908	1,026	118	852	56
支 払 承 諾	3,648	4,589	941	3,998	350
負 債 の 部 合 計	744,219	728,609	15,610	738,869	5,350
(資 本 の 部)					
資 本 金	5,481	5,481	-	5,481	-
資 本 剰 余 金	1,488	1,488	0	1,488	0
資 本 準 備 金	1,487	1,487	-	1,487	-
そ の 他 資 本 剰 余 金	0	0	0	0	0
利 益 剰 余 金	23,569	22,400	1,169	23,130	439
利 益 準 備 金	3,987	3,447	540	3,487	500
任 意 積 立 金	18,635	17,705	930	17,705	930
中間(当期)未処分利益	946	1,247	301	1,937	991
土 地 再 評 価 差 額 金	1,328	1,500	172	1,246	82
その他有価証券評価差額金	1,982	1,325	657	1,871	111
自 己 株 式	-	6	6	-	-
資 本 の 部 合 計	33,850	32,189	1,661	33,217	633
負 債 及 び 資 本 の 部 合 計	778,069	760,799	17,270	772,086	5,983

中間損益計算書

(単位:百万円)

科 目	当中間会計期間 (自 平成17年4月 1日 至 平成17年9月30日) (A)	前中間会計期間 (自 平成16年4月 1日 至 平成16年9月30日) (B)	比 較 (A - B)	前事業年度の 要約損益計算書 (自 平成16年4月 1日 至 平成17年3月31日)
経 常 収 益	7,657	7,585	72	15,067
資 金 運 用 収 益	6,064	5,925	139	11,859
（うち貸出金利息）	5,475	5,420	55	10,824
（うち有価証券利息配当金）	499	465	34	939
役 務 取 引 等 収 益	1,445	1,188	257	2,478
そ の 他 業 務 収 益	51	217	166	251
そ の 他 経 常 収 益	96	253	157	477
経 常 費 用	6,365	6,147	218	12,576
資 金 調 達 費 用	247	178	69	380
（うち預金利息）	222	161	61	340
役 務 取 引 等 費 用	588	555	33	1,127
そ の 他 業 務 費 用	0	100	100	214
営 業 経 費	4,999	4,884	115	9,830
そ の 他 経 常 費 用	529	428	101	1,023
経 常 利 益	1,292	1,437	145	2,490
特 別 利 益	42	24	18	236
特 別 損 失	98	140	42	254
税引前中間(当期)純利益	1,235	1,321	86	2,473
法人税、住民税及び事業税	545	1,207	662	1,837
法 人 税 等 調 整 額	42	666	624	820
中 間 (当 期) 純 利 益	732	780	48	1,456
前 期 繰 越 利 益	256	250	6	250
役員退職慰労金積立金取崩額	39	20	19	20
土地再評価差額金取崩額	82	195	277	449
中 間 配 当 額	-	-	-	199
利 益 準 備 金 積 立 額	-	-	-	39
中 間 (当 期) 未 処 分 利 益	946	1,247	301	1,937

中間財務諸表作成のための基本となる重要な事項

1. 商品有価証券の評価基準及び評価方法
商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は移動平均法により算定）により行っております。
2. 有価証券の評価基準及び評価方法
有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、子会社株式及び関連会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券のうち時価のあるものについては中間決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は移動平均法により算定）、時価のないものについては移動平均法による原価法又は償却原価法により行っております。
なお、その他有価証券の評価差額については、全部資本直入法により処理しております。
3. デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
4. 固定資産の減価償却の方法
 - (1) 動産不動産
動産不動産は、定率法（ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物（建物附属設備を除く。）については定額法）を採用し、年間減価償却費見積額を期間により按分し計上しております。
なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建 物	5年～50年
動 産	2年～20年
 - (2) ソフトウェア
自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間（5年）に基づく定額法により償却しております。
5. 引当金の計上基準
 - (1) 貸倒引当金
貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。
破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下、「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下、「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除した残額に、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率を乗じた額を計上しております。上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。
すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。
なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は5,721百万円であります。
 - (2) 退職給付引当金
退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき、当中間会計期間末において発生していると認められる額を計上しております。また、数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。
数理計算上の差異 各発生年度の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（5年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日次から損益処理
6. 外貨建資産及び負債の本邦通貨への換算基準
外貨建資産・負債については、中間決算日の為替相場による円換算額を付しております。
7. リース取引の処理方法
リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。
8. ヘッジ会計の方法
外貨建資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。
なお、一部の資産・負債については、金利スワップの特例処理を行っております。

9. 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税（以下、消費税等という。）の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、動産不動産に係る控除対象外消費税等は当中間会計期間の費用に計上しております。

中間財務諸表作成のための基本となる重要な事項の変更

（固定資産の減損に係る会計基準）

固定資産の減損に係る会計基準（「固定資産の減損に係る会計基準の設定に関する意見書」（企業会計審議会平成14年8月9日））及び「固定資産の減損に係る会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第6号平成15年10月31日）を当中間会計期間から適用しております。これにより税引前中間純利益は60百万円減少しております。

なお、銀行業においては、「銀行法施行規則」（昭和57年大蔵省令第10号）に基づき減価償却累計額を直接控除により表示しているため、減損損失累計額につきましては、各資産の金額から直接控除しております。

注記事項

（中間貸借対照表関係）

1. 子会社の株式総額 50百万円

なお、本項の子会社は、銀行法第2条第8項に規定する子会社であります。

2. 貸出金のうち、破綻先債権額は1,726百万円、延滞債権額は5,047百万円であります。

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下、「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令（昭和40年政令第97号）第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3. 貸出金のうち、3ヵ月以上延滞債権額は479百万円であります。

なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4. 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は6,488百万円であります。

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5. 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は13,742百万円であります。

なお、2.から5.に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は6,577百万円であります。

7. 担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産

有価証券 1,037百万円

担保資産に対応する債務

預金 388百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、有価証券32,601百万円及び貸出金19,400百万円を差し入れております。

また、動産不動産のうち保証金権利金は940百万円であります。

8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、189,007百万円であります。このうち原契約期間が1年以内のものが187,905百万円あります。

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒

絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

- | | |
|---|---|
| 9. 動産不動産の減価償却累計額 | 10,791百万円 |
| 10. 動産不動産の圧縮記帳額 | 352百万円 |
| 11. 土地の再評価に関する法律（平成10年3月31日公布法律第34号）に基づき、事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として資本の部に計上しております。 | |
| 再評価を行った年月日 | 平成10年3月31日 |
| 同法律第3条第3項に定める再評価の方法 | 土地の再評価に関する法律施行令（平成10年3月31日公布政令第119号）第2条第4号に定める方法に基づいて興行価格補正等の合理的な調整を行って算出 |
| 12. 取締役及び監査役に対する金銭債権総額 | 110百万円 |

（中間損益計算書関係）

- 減価償却実施額は下記のとおりであります。

建物・動産	200百万円
その他	63百万円
- その他経常費用には、貸出金償却306百万円、貸倒引当金繰入額103百万円を含んでおります。
- 当中間会計期間において、兵庫県内の処分予定資産及び遊休資産について、減損損失を計上しております。

減損損失を認識した資産は、地価の下落等から、帳簿価額を不動産鑑定評価基準等に基づき算定した正味売却価額まで減額し、当該減少額60百万円を減損損失として特別損失に計上しております。

なお、資産のグルーピングは、営業用店舗については管理会計で継続的な収支の把握を行っている営業店単位、遊休資産については各資産単位で行っております。

（リース取引関係）

リース取引関係の注記事項については、E D I N E Tによる開示を行うため、記載を省略しております。